歐洲の現勢　下卷

——戰局の展開と地政學——

金生喜造著

第二次歐洲大戰勃發してより一年有九ヶ月、獨の電擊作戰は着々功を奏して、先に波・白・蘭並びにスカンヂナビヤ諸國をその傘下に收め、佛亦その脚下に伏して和を請ふた。更に今バルカン諸國は悉く獨伊樞軸國側に靡き服し、近東に於ける民族解放運動より來る反英攻擊の鋒火は旣に火蓋を切り、今や現狀維持諸國の敗色歴然として世界史は將に轉換しつつある。この時に當り吾々の要請するものは單に表面的な戰局の推移のみならず、かく戰局を展開せしめる各國の歴史的發展の觀察と地政學的必然性でなければならない。而して金生氏の本著は此の要求に答へて吳れる好著である。

本卷は獨を中心とする中歐及び北歐諸國を取扱つた上卷に續くもので、第一編「地中海の覇權と軍略的地位」第二編「バルカンの新秩序と獨・伊・ソ聯」第三編「歐洲戰の展開と近東の形勢」、第四編「歐亞兩大陸に虎視するソ聯」並びに追錄「日・獨・伊三國同盟の意義——大東亞建設の至上命令」より成り、各編は夫々數章に分れてゐる。第一編に於てはファシスタ伊の興隆とその地中海の現狀打破の意慾、殊に伊の對外政策が植民地問題を外にしては考へられない所以、及び列强間に介在する西、瑞西の位置等を論じ、第二編に於てはバルカン諸國並びに土の史的發展と現勢を中心にして、此の地方が英の生命線であり、又獨・伊にとつても垂涎の的なる事等を說明し、第三編に於ては近東地方に於ける民族解放運動の發展、及びアラビヤ地方統一運動並びにパレスチナに於ける英の欺瞞政策を始めとして、近東に於ける列强勢力の角逐、對立を述べ、第四編は「ソ聯の行動は端倪すべからざるものがある。宛然としてスフインクスの謎である。ソ聯の謎を解く鍵はその利害關係を直視する事である」とのウインストン・チヤーチルの言を冒頭にかかげて、ソ聯の革命後の發展を概觀し謎に對して淺きメスを加へてゐる。

著者は先のエチオピア戰爭當時、吾國の輿論が專ら黑人帝國擁護に傾いてゐた際、敢然と該戰爭が伊の對英攻勢であり、エチオピアはその媒介にすぎず、而も對英攻勢なる點に於て滿洲事變と軌を一にする事を觀破、主張した（外交時報、昭和十年十一月一日號）慧眼の持主であり、その內容に就いては先づ全幅の信頼を置いて可なるべく、更に操觚の劇藥な業務の傍らかかる著を世に送られた筆者の精進とエネルギーに滿腔の敬意を表するものである。強ひて僭越な希望を述べさせていただくなら、地政學的な立場よりの將來への透徹せる洞察と著者が序文と追錄に於て高調してゐられる日・獨・伊三國同盟よりする「大東亞建設の至上命令」の意義のより一層の敷衍とを加へて欲しかつた。然し之は私の隘を得て更に獨を望む程のものにすぎないかも知れず、聊かも叙上諸國の現勢に到る史的發展の犀利な觀察と地政學的必然性の叙述に於け

る本書の價値を減殺するものではない。世上かかる著書の殆んど無き今日、本書を斯學專攻の人のみならず、廣く一般知識人が上卷と共に併讀されん事を望む次第である。妄言多謝。（昭和十五年十二月古今書院發行　四一八頁　定價四圓）（一六・五）〔岡本信太郎〕

彙　報

史學研究會

例會　五月十七日（土）、午後一時半より文學部陳列館第一教室に於いて開催、折柄豪雨の中にも拘らず參會された多數の聽者は左記の講演に示唆をうけるところ多いものがあつた。

林子平と古川辰　　本學講師　室賀信夫氏

林子平の三國通覽圖說は、カラフト・サハリン別個說その他の誤謬を含み、古川古松軒によつて痛烈に批難せられてゐる。この二人は共に地理に精しい學者であつたが、子平にあつては地理學は彼の政治理想の實踐の基礎として、いはゞ地政學（ゲオポリティク）として取上げられたに對し、古松軒の地理學は文人趣味より出でた雲烟の癖に止まつた。綿密正確な古松軒の記述よりも、却つて杜撰な子平の所說の方が大局の眞實を道破し得たのはこれによるものであらう。樂翁公を遡る子平、古松軒の對立は、古く三宅博士等の論題とせられたところであるが、この問題の回顧は、搖れ動きつゝある地理學界の現狀に何らかの示唆を與ふるものであると信ずる。

紀元二千六百年記念史學論文集刊行

紀元二千六百年のよき年を記念して、本學文學部に於いては史學に關する論文集を編纂刊行することになつたことは、豫て報ず